

追悼 中村 哲さん

ペシャワール会のアフガニスタン現地代表の中村哲さんが、2019 年 12 月 4 日、現地で、突然、襲撃され亡くなりました。まず驚き、そして悲しく、悔しく、無念でなりません。『荒れ果てた地を用水路を引くことにより緑の地に変える』中村さんのアフガニスタンでの活動と考え方は、真の人道支援の在り方を示し、ほんとうに多くの人々の「希望」と「誇り」でした。なまえの会も少しですがかわりがあります。なまえの会の運営の要であった、宮林さんが生前に、中村さんの講演会を開きたいと熱望し、宮林さんが亡くなった後、その意志を受け継ぎ、西宮に中村さんを招くことができ、同時になまえの会主催で、ペシャワール会の活動の記録の写真展を開催することができました。2012 年の夏の終わりのことです。そんな小さなかわりですが、私は心のどこかで常に「中村哲さんがいまもアフガンでがんばっている」と思い、自分の在り方の指標としていました。私と同じように感じている人達が、きっと星の数ほどいることでしょう。アフガンの人々、そして日本、また世界の人々にとっても、中村さんを失ったことは、どれほどの未来の可能性を失うことになるのだろうかと思うと本当に残念です。それでも中村さんの思いは、アフガンの人々ペシャワール会の人々、そして私たち数知れぬ人々に受け継がれていくと確信しています。

(文責 なまえの会 北野美貴)

2019.
12.5
朝日

アフガン 復興 志半ば

評伝 (略しています)

「最初から貧しい人を助けようと思っていたわけではありません」少年時代から昆虫が好き。「珍しいチョウが見られるかもしれない」と考え、福岡の山岳会の遠征隊に医師として同行し、1978 年にパキスタンへ。現地では医師が来ていると知った人たちが訪ねてきた。その場しのぎの診察しかできず、「村々で歓迎される」と、釈然としないうしろめたさがかえって増した。その体験が原点となった。84 年に同国のペシャワールに赴き、ハンセン病の治療に当たる。アフガン難民の一般診療にも取り組むようになり、アフガン国内へと活動の重心を移していった。

2000 年にアフガンが大干ばつに襲われ、清潔な水と食糧があれば治る病気でも亡くなる人が急増すると、「とにかく生きておれ。病気は後で治す」と、

飲料水確保のための井戸を掘った。

農業用水路建設は 03 年から。土木を独学して図面を描き、自ら重機を運搬した。現地の人々だけでなく維持・管理できるようにと、伝統的な技法を採用。取水堰は、江戸時代に築かれ、今も使われている山田堰(福岡県朝倉市)をモデルにした。「医学部を卒業したころは、アフガンで河川工事をすると想像もしていませんでした」

「復興は軍事ではなく農業から」との信念のもと、近年は国連機関や国際協力機構(JICA)とも連携し、ノウハウをアフガン全土に広めようと考えていた。73 歳だった中村さんは「あと 20 年は活動を続ける」と周囲に語っていた。無念さはいかばかりか。

(佐々木亮)



中村哲医師

中村医師の
発言

14年 日本の集団的自衛権の行使容認に「活動はこれまでになく危険になる」と懸念

16年 朝日新聞のインタビューで、瀧渡(かんがい)事業中心の活動について「合言葉は 100 の診療所より 1 本の用水路」

19年 10月、アフガン大統領が名誉市民権を授与

「私たちの試みが多くなると人々に希望を与え、少しでも悲劇を緩和し、より大きな規模で国土の回復が行われることを願う」

「軍事でなく農業から」井戸掘る